

|             |   |
|-------------|---|
| Title       | 北宋時代の洛陽と士人達：開封との對立のなかで  |
| Author(s)   | 木田, 知生  |
| Citation    | 東洋史研究 (1979), 38(1): 51-85  |
| Issue Date  | 1979-06-30  |
| URL         | <a href="http://dx.doi.org/10.14989/153725">http://dx.doi.org/10.14989/153725</a> |
| Right       |   |
| Type        | Journal Article   |
| Textversion | publisher   |

# 北宋時代の洛陽と士人達

——開封との對立のなかで——

木 田 知 生

はじめに

四 洛陽の人々

一 宋初までの洛陽

(一) 文人士大夫の交游

二 四京體制のなかの洛陽

(二) 「洛陽耆英會」

三 洛陽の風致と交通

(三) 洛陽派の理財觀——その限界——

(一) その風致

結 び

(二) 開封との交通

は じ め に

北宋の嘉祐八年三月二十九日、宋朝第四代皇帝仁宗が、東京汴京開封府で崩御した。當の開封では、市場が停止され、庶民の哭聲が何日もの間止まなかった。乞食やいとけない子供までもが大内の前で紙錢を焚き、帝の死を悼んだ。天子崩御の報せはいち速く西京洛陽河南府に齎された。その時、城中の居民、軍民から婦女子に至るまで、朝夕、東の方開封に向かつて號泣し、紙錢を焼く煙が空を蔽い、天日も光を失った、とある記事は傳えている。<sup>①</sup>

東京開封府と西京河南府との緊密な關係を示す如右のエピソードは二三に止まらない。都市の規模といい、文化の熟成度といい、北宋時代の東京汴京開封府と西京洛陽河南府とは、對抗關係のなかに考究される要素をまだ多分に殘している。だが、従前の北宋史研究では、大率、西京に言及することは少なく、無視されることはなくとも、大いに輕視される

傾向にあった。<sup>②</sup> 本稿はその缺を補うため、五代・北宋初期から北宋中後半期に至る政治情勢の中に、この兩都の拮抗關係を解き明かそうとするものである。

## 一 宋初までの洛陽

太祖趙匡胤の治世の末年、洛陽遷都の意向が有ったことは、あまり知られていない。元來、洛陽城中の夾馬營に生を享けた太祖は、その風土を愛し、かねてからその意圖を抱いていた。事柄は、李燾『續資治通鑑長編』（以下、『長編』）卷一七・開寶九年夏四月癸卯の條に見えている。<sup>③</sup>

「上生於洛陽。樂其土風、嘗有遷都之意。始議西幸。起居郎李符上書陳八難。曰京邑凋弊、一難也。宮闕不完、二難也。郊廟未修、三難也。百官不備、四難也。畿內民困、五難也。軍食不充、六難也。壁壘未設、七難也。千乘萬騎盛暑從行、八難也。上不從。既畢祀事、尙欲留居之、羣臣莫敢諫。鐵騎左右廂都指揮使李懷忠乘間言曰、東京有汴渠之漕、歲致江淮米數百萬斛、都下兵數十萬人、咸仰給焉。陛下居此、將安取之。且府庫重兵、皆在大梁。根本安固已久、不可動搖。若遽遷都、臣實未見其便。上亦弗從。晉王又從容言遷都非便。上曰、遷河南未已、久當遷長安。王叩頭切諫。上曰、吾將西遷者無它、欲據山河之勝而去冗兵、循周漢故事、以安天下也。王又言、在德不在險。上不答。王出。上顧左右曰、晉王之言固善、今姑從之。不出百年、天下民力殫矣。<sup>④</sup>」

太祖の考えでは、洛陽への遷都はまだ最終のものでなく、軍事面に鑑み、要衝としてより安定している長安への最終的な遷都を構想していたのである。洛陽は、後文でも説くように、度々、遷都論の對象となつたのである。いま、この洛陽の歴史を一通り鳥瞰してみることにしよう。

洛陽が長安か、という奠都議論は、前漢の時にも見られ、その時には、周知のように長安に決まっている。

この前漢長安は、軍事要衝であるほか、豊かな農業生産物を後背地に容易に獲得できる位置にあり、何よりも先ず、強力な政治力の中心地であった。國都のこうした政治的性格は、後漢の雒陽、三國魏・西晉の洛陽にも繼承される。北魏太和十七年、孝文帝の修復を経た翌年、北魏はこの地を國都とし、その後、東西魏の分裂により、一旦は全くの荒廢地と化した。隋の統一以後、北魏洛陽城とはほぼ同規模の新城が、西方三十里の地に築かれ、西の長安に對して東都と呼ばれることになった。唐はこれを承ける。隋唐時代、長安は政治都市としての、洛陽は經濟都市としての役割を各々分擔したと言えるが、というのも、大運河を経由して運ばれる江南物資が、一先ず洛陽で集散されることになっていたからである。

隋煬帝を始めとして、唐代の諸帝が百官を引き連れ、洛陽に度重なる「就食行」を舉行了した事實からも、兩都の比重は次第に東方の洛陽に傾きつつあったことがわかる。だが、玄宗の開元末年に裴耀卿の漕運改革が必要であったように、汴河・汴口から洛陽への物資運搬さえ容易なことではなく、そこで、首都はさらに東方に、それも運河と直結した交通至便の地に建立されることが、物資の集散流通の面からも翹望されることになった。五代後梁の朱全忠が開平元年に汴州に奠都し、ここを東京開封府とした事實は、時代の要請に適った動きであったと言い得よう。中原五王朝のうち、後梁に續く沙陀族出身の後唐のみは、唐王朝との接續を強調し、再び洛陽に都を遷し、五代時代、汴州に都を置かぬ唯一の例外となった。

次の後晉では、漕運上、斷然に便利な汴州に再遷都することになる。① 僅かに四箇年の命脈を保つだけの次の後漢も、極く一時的に洛陽に都することがあったが、結局、半歳も経たぬうちに汴州に舞い戻る。② 五代最後の後周では、開國の當初から汴州に都が定められ、以後、北宋末の靖康の變に至るまで、この地汴京開封府は帝都として存在することになった。中原に君臨した諸王朝の國都は、大きな潮流として、西方から東方へ、長安から洛陽へ、さらに汴州へと移動したのである。

北宋初期以降の汴京開封府の外観とその景觀の變遷については拙稿を参照して戴くとして、次に唐末以降の洛陽につい

て考える。

唐朝末期の洛陽は凄じい混亂の内に在った。黃巢の亂による混亂に加え、續いて孫儒と諸葛爽の反亂軍がこの地に據つて衰落到拍車を掛けた。『舊五代史』卷六三・張全義傳の傳える所に従えば、

「初、蔡賊孫儒・諸葛爽爭據洛陽、迭相攻伐。七八年間、都城灰燼、滿目荆榛。」

といった慘狀であつたし、『新五代史』にも、「城邑殘破、戸不滿百」と記している（卷四五・張全義傳）。さらに、張齊賢の『洛陽搢紳舊聞記』に據つて具體的に見てみると、

「時洛城兵亂之餘、縣邑荒廢、悉爲榛莽。白骨蔽野、外絕居人。洛城之中、悉遭焚毀。」（卷二・齊王張令公外傳）

とあるように、唐末の洛陽は、實に想像を絶する廢墟と化していたのである。

この舊都の荒廢は、張全義が後梁の初めに河南尹としてこの地に着任してからのち、次第に舊來の面目を取り戻し始めることになる。『舊五代史』に云う。

「全義初至、唯與部下聚居故市。井邑窮民、不滿百戸。全義善於撫納、課部人披榛種藝、且耕且戰、以粟易牛、歲滋墾闢、招復流散、待之如子。每農祥勸耕之始、全義必自立畎畝、餉以酒食、政寬事簡、吏不敢欺。數年之間、京畿無閑田、編戸五六萬、乃築壘於故市、建置府署、以防外寇。」（卷六三・張全義傳）

着々と善政の實績が擧げられる一方、宮殿の修復もまた進捗を見た。

「及梁太祖劫唐昭宗東遷、繕理宮闕・府廨・倉庫、皆全義之力也。」（『新五代史』卷四五）

張全義が没する後唐同光四年（西曆九二六年）の頃までには、洛陽は一段と都會の壯を加えることになった。同じ後唐の天成四年六月には「京城空地、課人蓋造。如無力者、許人請射營構。」（『舊五代史』卷四〇・明宗紀）といった内容の詔が出て、都城建設はさらに進んだのである。

一方、帝都としての汴京開封府は、後周時代に一應の安定を見ていた。後周廣順三年、太祖郭威が洛陽に南郊せんとした際、左右の執政から「何ぞ必ずしも洛陽ならんや」と、強硬な反対意見が提出され、その歳、太廟・社稷壇が初めて開封に築かれた。<sup>④</sup>ここに、開封が唐以前の故都からほぼ獨立したことが看取されるが、北宋初の段階では、宮闕殿門の整美に於いて、開封はなおまだ、洛陽に譲る所があったのである。<sup>⑤</sup>

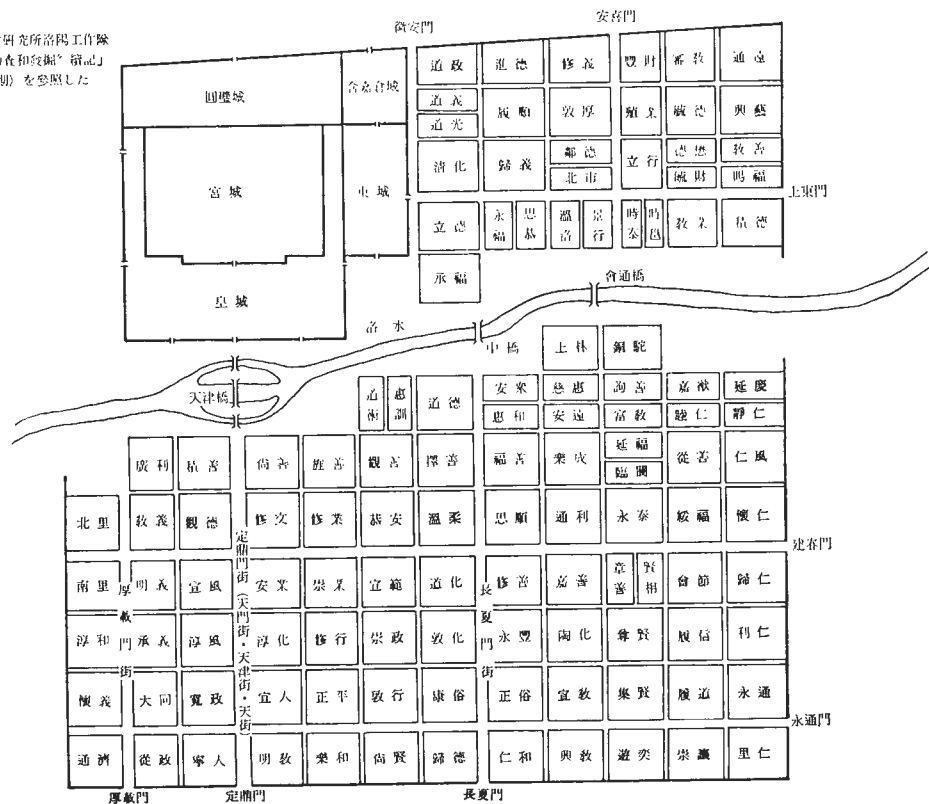
さて、北宋初の洛陽城の規模は、宮城の周廻が九里三百步、京城の周廻は五十二里と報告されている（『會要』方域一）。一方、東京開封はというと、洛陽が二重の城郭を持ったのとは異なつて、内から順に宮城・内城・外城の三重の城郭を擁し、周廻は順に、五里・二十里一百五十五步・五十里一百六十五步であつた。洛陽が、開封と比較して、宮城規模に於いて、また、京城の規模についても、いくらか上廻つていたことが知られる。この點には十分注意して置くべきであろう。その後の洛陽城は、皇祐二年に張全義の七世孫と云われる張奎によつて少許の修築を加えられたほか、大きな改築を経験しなかつた。<sup>⑥</sup>

次に、宋初洛陽の坊市について見て置く。唐以來の坊制は、國初には、まだ實質の備つたものだったが、北宋中期以降に形骸化していく。一方、市制の實質崩壞は、この坊制の崩壞より以前に進行していたと思われる。<sup>⑦</sup>宋初の洛陽の坊名は、清朝時代、徐松等の編輯に係る『宋會要輯稿』方域一・西京の條に、一定した順序で記録されているが、この徐松は、唐の長安洛陽の城坊に關する著述『唐兩京城坊考』をも残している。その唐洛陽城の記載と對照すると、全坊一百十九坊の内、一百七坊までが唐代の坊名と全く同一であることが知られるほか、唐代には嚴存した、南市・西市・北市の各市が、『會要』の記載から消え失せているのに氣づく。さらに、『元河南志』の内容と比較すると少なからざる相違點が浮かんで来る。いま、それらを彼此對照し、勘案整理すると、左の略圖が得られる。この圖を見て戴けばわかるように、宋代洛陽は、大率、唐洛陽の都城プランを踏襲しているが、唐代の三市、南市・西市・北市の三市は、各々、南市↓通利坊・樂成坊、西市↓通濟坊、北市↓北帝坊（『元河南志』卷一では北市坊）・鄰德坊、と名を變じ、その周邊の坊にも、新設及

北宋洛陽城  
街坊大略圖

1000 m

中國社會科學院考古研究所洛陽工作隊  
「隋唐洛陽城址的勘查和發掘」續記」  
(考古 1978 年第 6 期) を参照した



び移動が見られた。宋初にかけてのこの市名↓坊名の背景には、市制の崩壊という事実があったのである。<sup>⑧</sup>  
唐末五代を経て宋初に至る洛陽と、その城郭・宮城の變容については、大體、以上の説明に盡きよう。

## 二 四京體制の中の洛陽

北宋は四つの京府を有していた。すなわち、正都の東京開封府（汴京）のほか、西京河南府（洛陽）・南京應天府・北京大名府の四京である。だが、この四京は國初から時を同じくして成立していたのではない。國初には、東京と西京との兩京體制でスタートしている。

南京と北京が成立を見るについては、各々、特殊な理由があった。

先ず、南京應天府は、太祖趙匡胤が、もと歸德軍に鎮した故事に基づいており、眞宗の景德三年二月に、歸德軍の所在する宋州（宋の國號は、この地名に因っている）を升格させて應天府とし、大中祥符七年正月には、ここに南京を建てた。<sup>⑨</sup>太祖太宗の御容を奉ずるなどして、一應、京師の體裁を整えたが、『宋史』地理志（卷八五）に據れば、宮城の周廻は僅かに二里三百一十六步、その外側の京城の周廻にしても十五里四十步と極めて小規模な構造であった。他の三京と比較すると、この南京の持つ意味はさほど大きくはない。

次に北京。この建都事情には複雑な要因が幾層にも絡み附いていた。先に、建都の事實關係を明らかにして置こう。  
後周時の天雄軍、宋の大名府に建都の詔が下ったのは、仁宗の慶曆二年五月。翌六月には、樞密副使・右諫議大夫の任中師を修建北京使に、翰林學士・尙書禮部郎中・知制誥・史館修撰の蘇紳を同副使として任に赴かせた。翌慶曆三年二月には、便殿に「靖方」の名を與え、同七年六月には、留安司御史臺が設置されたが、都城建設は容易には進捗しなかった。



模様で、漸く、神宗の熙寧八年十二月になって、内外城門に雅名が與えられている。城内は二十三坊、左右には四廂が置かれた。都城規模は、宮城の周圍が三里一百九十八步、京城の周圍は四十八里二百六步と、かなり大きい。外城の周圍は、開封のそれと伍する堂々たる規模である。こうした規模を維持することになったのは、實は、當時の北邊事情と密接な關聯がある。

仁宗の慶曆年間、北邊には、一時屏息していた契丹が再び活潑な動きを示し始めていた。慶曆二年三月には、契丹使節として蕭英と劉六符がやってきて、從來からの繫争の地・「關南之地」(瓦橋關以南十縣の地)を求める事態にまで進展した(『長編』卷二三五)。これに對して宋側は、宰相呂夷簡が推薦する、右正言の富弼(後文參照)を接伴使とし、國境での應接に當たらせた。結果は、銀絹の増幣をよぎなくされたものの、まずまずの上首尾で、富弼が大任を果し終える形で終熄し、大事に至らずに済んだ。だが、この事件が、澶淵の盟以來、四十年近く平穩な日々を過してきた宋朝に、大きな衝擊を與えた事實は見遁せない。

これより以前、一部の有識者には、北邊での經驗もあって、國境守備強化の氣運が高まっていた。北宋士大夫の範と仰がれる范仲淹はその主導者の一人である。景祐中、天章閣待制・權知開封府であった時、既に「論西京事宜劄子」(『范文正公集』卷一九所收)を奉って、強く洛陽遷都を進言し、邊防強化を訴えている。その論に云う。

「前略。西洛帝王之宅、負關河之固。邊方不寧、則可退守。然彼空虛已久、絕無儲積。急難之時、將何以備。宜以將有朝陵之名、漸營廩食。陝西有餘、可運而下。東路有餘、可運而上。數年之間、庶幾有備。太平則居東京、通濟之地、以便天下。急難則居西洛、險固之宅、以守中原。後略。」(『長編』では卷一八・景祐三年五月戊寅朔の條)

洛陽四邊の險固に依據し、危急の際には是非とも洛陽遷都を斷行すべしとの意見具申である。これを受けた宰相呂夷簡は「迂闊之論也」としてこの案を退け、爲に范仲淹は落職し、知饒州に左遷されることになった。後世に喧しい「朋黨之論」は、この事件を契機として起こったとされている。中央政界でこうした暗闘が展開される一方で、時あたかも北邊には契

丹南進の報が傳わってきた。既述の如く、實際に、慶曆二年三月には使節が派遣されてきたのである。そこで、この時、再び范仲淹の議論が蒸し返されることになった。「及契丹將渝盟、言事者請從仲淹之請。」と『長編』は簡単にその間の事情を傳えている（卷一三六・慶曆二年五月戊午）。呂夷簡が、この情勢を黙って見過す筈はなく、早速、反撃に打って出た。

「呂夷簡謂虜長壯侮怯、遽城洛陽、亡以示威、必長虜勢。景德之役、非乘輿濟河、則虜未易服也。」（『長編』卷一三六）ここで、呂夷簡は、范仲淹等の洛陽遷都案に對抗するべく、別案を創設提示しなくてはならなくなった。そこで出て來たのが、北京建都案である。『長編』には、續けて、

「宜建都大名、示將親征、以伐其謀。」

と記している。これには、范仲淹派からの反撥が必至であった。

「詔既下。仲淹又言、此可張虛聲爾、未足恃。城洛陽既弗及、請速修京城。」

從來の洛陽遷都築城案のほか、東京開封城をも迅速に修築せんことを願ひ出た。この案は、多くの贊同者を得ることが出來たが、呂夷簡は、この案をもにべも無く峻拒する。曰く、

「此囊瓦城郢計也。使虜得渡河、而固守京師、天下殆矣。故設備宜在河北。」

結局、この呂夷簡の案が採擇されて、北京建都が實現されることになったのである。范仲淹の上奏は、こうした成行を迎えても、なおもまだ止まなかつた。さらに、東京開封城を修築し、「城を高くし池を深くす」る旨、具體的な狀況説明とともに繰り返し切望した。『范文正公集』卷一九に收める「乞修京城劄子」がその文面である（『長編』卷一三六）。その文で、

「至於西洛帝王之宅、太祖營修、蓋有意在子孫、表裏山河、接應東京之事勢、連屬關陝之形勝。又河陽據大川之險、當河東之會要、爲西洛之北門。又長安自古興王之都、天下勝地、皆願朝廷留意、常委才謀重臣、預爲大備、天下幸甚。」  
 と言っているのは、前に引いた『長編』卷一七所載の太祖洛陽遷都構想と正確に呼應し合い、北宋中期に至っても、洛

陽・長安の兩故都が常に人々の念頭に在ったことを物語っている。

北京建都のあった翌年、慶曆三年七月には、對西夏戰での范仲淹の若い同僚・韓琦（時に歳三十五。ちなみに、范仲淹・呂夷簡の年齢は各々五十四・六十四歳）が、洛陽を營建すべしとの上奏を進上している。

「前略。七曰、營洛邑。今帝都無城隍之固、以備非常。議興葺則爲張皇勞民。不若陰葺洛都、以爲游幸之所、歲運太倉羨餘之粟、以實其廩庾、則皇居壯矣。」（『韓魏公集』卷一六・論備禦七事、『長編』卷一四二）

さらに翌四年にも、陝西から中央に戻った韓琦が、范仲淹とともに四策を崇政殿に奏上し、該地の情勢に鑑み、再び京師の外城を修築せんことを請うている（『韓魏公集』卷一七・奏陝西河北攻守、『長編』卷一四九・四年五月壬戌朔條）。その時點では、諫官余誥の諫言によって實行を見なかったが、それから數年を経た皇祐元年八月から、漸くのことに京城改築が着工されている（『會要』方域一、參照）。

ともあれ、北京大名府の建立には契丹南下という現實の緊急情勢に加え、さらに、中央政界での官僚間の軋轢、抜き難い故都回歸思考などの諸要素が複雑に絡み合っていたのである。

こうして、慶曆初年の北京建都を最後として、北宋の四京體制が整った。西京洛陽は、特に最後の北京建都によって、或る意味で、その大きな自重の一部を失うことになる。すなわち、その軍事重要度の輕減が、それである。しかし、このことによってこそ、洛陽は、その都市機能をより一層洗煉させ、専ら、學術文化の成熟度を高めることが可能となった。後文で問題にする洛陽の「文化都市」とも呼び得る性格は、首都開封と拮抗する關係の中で、この仁宗期に胚胎したものと考えてよいのである。

### 三 洛陽の風致と交通

#### (一) その風致

西京河南府洛陽の地勢と風俗を概観してみよう。

邵伯溫『前錄』卷一七、に「洛中形勢」が概述されている。まずは、その山。

「邙山在西、邙山在北、成臯在東、以接嵩闕塞。其直南屬女几、連荆華、至終南山。」

洛陽は、大黃河が河北の大平原に流れ出んとする地點にあり、周圍をほとんど山で圍まれ、盆地の中央に位置していた。<sup>⑤</sup>

次は水である。水を離れて都市はない、とはよく云われることだが、洛陽もその例外でない。洛陽といえはすぐに、洛水・伊水が想い浮かぶ。

「洛水來自西南、伊水來自南、右澗水、左瀍水。」（同右）

四方の高山と幾條もの河川こそが、洛陽の天下に勝れた地勢を成り立たせていた素材であった。蘇舜欽が「鳳樓前後看山河」（『蘇學士文集』卷六・遊洛中内）と詠じ、「高山大河、平川沃野、形勢壓天下。」（『前錄』卷一七）と稱えられた地勢は、「眞天闕也」（『前錄』卷一七所引の隋文帝の言）と呼ばれるに充分の要害の地であり、また、故都であった。

宋代の洛陽を特徴づけていたのは、こうした山河の險のみではない。その風俗の美こそ多くの史書が力説し、また、何よりも、當の洛陽人の誇りとするところであった。

「洛中風俗尚名教。雖公卿家、不敢恃形勢、人隨貧富自樂、於貨利不急也。」（『前錄』卷一七）

洛陽人の胸中に、故都に住いする自信と餘裕があったことを、この邵伯溫の言は傳えている。この感情は、新都東京開封

の居住者には無いものである。そして、この點にこそ、新興都市・開封に對する洛陽人のプライドと對抗心の據り所があったのである。

水竹花木の勝も、宋代洛陽の誇るところであつた。

「洛陽民俗和平、土宜花竹。」（同右）

花といへば、宋代では、先ず牡丹を指す。この牡丹の愛好・重視は、唐代、とりわけ武則天時代から始まっているが、宋人のこの花への愛着にも並々ならぬものがあつた。例えば、洛陽と縁淺からぬ人物を例に取れば、范純仁の『范忠宣公文集』卷三等に、牡丹を詠じた數篇の佳句が見えている。しかし、何といつても、歐陽脩の『洛陽牡丹記』が有名である。その風俗記第三の條。

「洛陽之俗、大抵好花。春時、城中無貴賤皆插花、雖負擔者亦然。花開時、士庶競爲遊遨、往往於古寺廢宅有池臺處爲市、并張幄帟、笙歌之聲相聞。最盛於月陂堤張家園棠棣坊長壽寺東街與郭令宅。至花落、乃罷。」

牡丹の花開く時節には「萬花會」と名づけられた催しも行なわれていた。張邦基『墨莊漫錄』卷九に、

「西京牡丹聞於天下。花盛時、太守作萬花會。宴集之所、以花爲屏帳、至於梁棟柱拱、悉以竹筒貯水簪花釘挂、舉目皆花也。」

とあるのを讀めば、その盛んな様を、まさに眼の當たりに觀る思いがする。<sup>⑧</sup>

『前錄』卷十に、「洛中公卿庶士園宅、多有水竹花木之勝」と云う通り、洛陽城中では、牡丹を中心に、花卉の美がことのほか尊ばれ、城中城外には文人士大夫の園林が數多く營なまれたのである。「花王」牡丹を含めて、洛陽の花木に關しては、神宗期の人・周鉉に『洛陽花木記』一卷（元豐五年自序。商務印書館本『說郭』卷二六に、一卷の全文が載っている）があり、哲宗時代の人・李格非（蘇軾の門弟）には『洛陽名園記』一卷の著作があつて、『元河南志』卷一の記事とともに、洛陽の園囿の大體を窺うことができる。

さて、その『洛陽名園記』には、富弼の園池を初めとして、文彦博の東園、司馬光の獨樂園等が紹介されているが、李格非の自跋には、洛陽の盛衰とその園林の廢興に關して極めて大膽な推斷が下されている。

「論曰、洛陽處天下之中、挾穀澗之阻、當秦隴之襟喉、而趙魏之走集、蓋四方必爭之地也。天下常無事則而已。有事則洛陽先受兵。予故嘗曰、洛陽之盛衰者、天下治亂之候也。方唐貞觀開元之間、公卿貴戚開館列第於東都者、號千有餘所。及其亂離、繼以五季之酷、其池塘竹樹、兵車蹂踐、廢而爲邱墟、高亭大樹、烟火焚燎、化而爲灰燼、與唐共滅而俱亡者、無餘家矣。予故嘗曰、園圃之廢興者、洛陽盛衰之候也。且天下之治亂、候於洛陽之盛衰而知、洛陽之盛衰、候於園圃之廢興而得、則名園記之作、予豈徒然哉。後略。」（傍點筆者）

この李格非の論の當否はしばらく後文の説明に譲ることにし、東京開封との距離・交通について述べて置こう。

## （二）開封との交通

現在の河南省地圖を見れば、すぐわかることだが、開封と洛陽との距離は、『太平寰宇記』卷三にも、その距離四百二十里、と示してある通り、直線にしたかだか二百キロメートル程しかない。この兩都の間、やや開封寄りの所には鄭州が位置する。開封からこの鄭州までは、一百四十里（『太平寰宇記』卷九）。莊綽『雞肋編』卷上に、

「鄭州去京師兩程、當川陝驛路。」

とあるように、ほぼ二日の行程である。この鄭州から洛陽までは、さらに約二百八十里（『太平寰宇記』卷九）。文彦博『文潞公文集』卷三四・隨表劄子中の「自京至洛六驛」の句が示すように、さらに四驛あった。但し、以上は陸行の場合。右の文彦博の劄子は、元祐初年、洛陽への休退を願い出た際のものだが、右引用文の續きで「洛汴未凍閑、乘舟至洛、稍得安穩」と言い、同卷に載す別の劄子中にも「以羸老、難以陸行。欲於正月乘船歸洛。」（元祐四年十二月二十日上呈。時に文彦博、年八十四）と請うているように、舟行も可能であったし、むしろ、より一般的な交通手段であった。そのルートは、開

封外城西水門から汴河を溯って汴口に達して黄河に入り、洛口から洛陽までは洛水を用いたのである。

元豊初年からの十年程、つまり、後文で問題とするように開封と洛陽との都市機能が、相互に最も際立って對立的であった一時期には、洛陽から開封まで、直接に舟行することが可能であった。その際にも、文彦博が盡力している。『前録』卷十、

「元豊初、開清汴、禁伊洛水入城。諸園爲廢、花木皆枯死、故都形勢遂滅。四年、文潞公留守。以漕河故道湮塞、復引伊洛水入城、入漕河、至偃師、與伊洛匯、以通漕運、隸白波輦運司。詔可之。自是由洛舟行可至京師。公私便之。洛城園圃復盛。後略。」

一時とはいえ、洛陽の花木が枯死したことがあったのは、時あたかも開封で新法が行なわれていた最中であるだけに、先の李格非の言に照してみても暗示的である。

さてこそ、開封と洛陽との間は四州陝西へ向かう幹線交通路で結ばれており、かなり容易に往來することが可能だったのである。しかし、兩都間のこの身近かさは、兩都の性格を近似させるものとしては作用せず、むしろ、各々の異なった性格を際立たせることになったのである。

#### 四 洛陽の人々

##### (一) 文人士大夫の交游

宋代、高官に達した官僚士大夫達が都市に徙居した例や、都市近郊に墓所を移した例は、青山定雄氏の華北官僚の系譜についての連作に数多く報告されている。特に洛陽は、前章までに述べた如く、多くの中原王朝の故都として、また、その景觀・風俗の美によって多くの文人士大夫の意識にのぼり、憧れの土地として彼等を惹き附けた。仁宗時代の人・張觀

の父居業もその一人。『宋史』卷二九二・張觀傳に、

「前略。居業嘗過洛、嘉其山川風物、曰吾得老于此足矣。觀於是買田宅營林樹、以適其意云云」  
とあるように、晩年の悠々自適の地として洛陽が選ばれることが多かった。

宋初の人について見ると、親屬の呂夷簡を時の眞宗に推薦し、若き富弼と文彦博の才をいち早く認めた呂蒙正（河南人）は、景德二年、許國公に封ぜられて洛陽に退くと、「有園亭花木、日與親舊宴會、子孫環列、迭奉壽觴、恬然自得」（『宋史』卷二六五・本傳）といった調子の生活に入つたし、嘗つて太祖の洛陽行幸の折に見出された宰相張齊賢も、大中祥符末年（七年夏没）に歸洛すると、唐の裴度の午橋莊を入手し、あとは悠然たる毎日だった。「有池樹松竹之盛、日與親舊觴詠其間、意甚曠適。」（『宋史』卷二六五）

こうした、宋初の文人士大夫達の洛陽での生活は、どちらかと言えば退嬰的な色合いが濃厚だと言えなくもない。それが、轉調を遂げ、この地の士大夫達に、そして、この洛陽自體に新たな活氣を與えることになったのは、のちに宋朝の文運を一新することになる若き歐陽脩が、留守西京の錢惟演（舊吳越國王錢俶の男）の配下へ、西京留守推官として赴いたことが契機となった。時に、仁宗治世の初年、天聖九年のことである。錢惟演はこの前年に「先隴在洛陽（賢相坊陶公原）、願守宮鑰」（『宋史』卷二二七）と上言して判河南府に任ぜられていた。もともと文學にも深い造詣のあった彼は歐陽脩の文才を認めてこれを稱揚し、幕下に蟬集していた文士との交遊の輪に加えた。當時、錢惟演は六十九歳、一方の歐陽脩はまだ二十五歳であったというから、歐陽脩の天才ぶりと錢惟演の厚遇が知られようというものだ。ほかにこのサークルに名を列ねた者は、主だったところでは、通判の謝絳、嘗書記の尹洙、それに、當時、洛陽主簿となっていた梅堯臣（謝絳の妹の婿。時に三十歳）があった（以上、『東軒筆錄』卷三、『湘山野錄』卷中、『澠水燕談錄』卷四、『錢氏私誌』等に依據）。歐陽脩とその同僚等は大いに詩を賦し、互いに切磋琢磨し、傍目には職を廢するかと思われる程であった、と云う。いま、『東軒筆錄』中からその一端を摘録してみよう。



「皆一時文士。遊宴吟詠、未嘗不同。洛下多水竹奇花。凡園囿之勝、無不到者。」

歐陽脩・梅堯臣の文筆の業は、實に、仁宗初年、この洛陽での修業時代に基づくことを知り得るのである。

宋初から進んでいた洛陽への文人士大夫の集結は、これを機會にさらに促進されることになった。皇祐元年、時に杭州に在った范仲淹は、子弟等から「治第洛陽、樹園圃、以爲逸老之地」と請われたが、『宋名臣言行錄』前集卷七、この申し出を穩やかに拒絕。その文句に、

「人苟有道義之樂、形骸可外。況居室哉。吾今年踰六十、生且無幾。乃謀樹第治園、顧何時而居乎。吾之所患、在位高而難退、不患退而無居也。且西都士大夫園林相望、爲主人者、莫得常遊而誰獨障吾遊者。豈必有諸已而後爲樂耶。」

とあるのからわかるように、仁宗の末年頃までに、西京洛陽は「士大夫淵藪」としての實質を備えるに至っていた。これは、洛陽が、仁宗末期頃までは、開封とは異質の獨自な都市として成長してきたことを意味している。從來からの、故都住民であるブライドに、士大夫達自身の、彼等の文化に對する大きな自信が附け加わってきた。『道山清話』（徽宗時代、蜀黨の一員によって書かれたとされる。『四庫全書總目提要』卷一四一）の、

「趙先生、蔡州人。後往來無定。蘇子由（蘇轍）諸公極愛重之。嘗言人將發、不惟門戶有旺相、視僕史輩亦可知。洛中士大夫家僕史、往往皆官樣云云」

といった文面は、洛陽士人の氣宇を別側面から説き明かす。

この氣宇は、東京開封の中央官達に畏怖を與えるものに成長しつつあった。そこで、次に、仁宗期以降に顯著になった、開封と洛陽の對立、特に、政治的な對應について考慮せねばならないであろう。

西京洛陽には、國初から西京留守司御史臺（略して西京留臺）が置かれていた。いわゆる「分司官」である。これは、例えば「以老疾權判西京御史臺」（『宋史』卷三〇一・張旨傳）と史料に見え、『石林燕語』卷四に、

「西京留臺、皆有公宇。亦榜曰御史臺。舊爲前執政重臣休老養疾之地。」

と記されているように、仁宗中期頃までは、額面通り「重臣養疾之地」であつた。この西京留臺のほか、洛陽には、仁宗景祐元年、西京國子監も設置されることになる。『燕翼詒謀錄』

「四月癸酉、詔以河南府學爲西京國子監、置分司官。其後南京北京皆援爲之。」（卷四）

「西京學校、舊爲河南府學。景祐元年、詔改爲西京國子監、以爲優賢之所。」（卷五）

南京北京にも、その後、各々國子監が置かれ、また、慶曆五年と七年には、留司御史臺も設けられたのである（『會要』方域二）。これらの分司官は、『卻掃編』卷上に、

「本朝三京、雖置御史臺國子監、執政侍從庶官迭居之、職事甚簡。御史臺則行香拜表日押班、國子監則出納錢糧而已。」と記すように、一般的には、やはり、「休息之地」と見爲されていた。その分司官も、西京では皇祐頃から、開封から、一癖も二癖も有る人物が集まつて來ると、實際の仕事を幾分なりとも分擔する傾向となる。『石林燕語』（承前揭文）には、

「皇祐間、吳正肅公（吳育）爲西京留臺、獨舉其職。時張堯佐以宣徽使知河南府。郡政不當、有訴於臺者。正肅卽爲移文詰之。堯佐皇恐、奉行不敢異。其後司馬溫公、熙寧元豐間、相繼爲者十七年、雖不甚預府事、然亦守其法令甚嚴。如國忌行首等、班列有不肅、亦必繩治。」

と記している。洛陽が東京開封から少なからざる退任者（その多くは政界實力者だった）を受け入れ、舊來の文學グループのほか、別箇に政治グループが形成される素地が、そろそろこの時期から醸成され始めていたと考えて差し支えないであろう。そして、この地が、よりはっきりと開封に對立する地となるのは、神宗の初年、王安石の登壇を迎えてから後のことである。

王安石の登場については『前錄』を見よう。その卷一九に、撰者邵伯溫が、先考邵雍（康節先生）の「先天之學」を説いている。有名な「天津橋上聞杜鵑」の一文である。

「治平間、與客散步天津橋上、聞杜鵑聲、慘然不樂。客問其故、則曰、洛陽舊無杜鵑、今始至、有所主。客曰、何也。

康節先公曰、不二年、上用南士爲相、多引南人、專務變更、天下自此多事矣。客曰、聞杜鵑何以知此。康節先公曰、天下將治、地氣自北而南將亂、自南而北、今南方地氣至矣。禽鳥飛類、得氣之先者也。春秋書、六鵠退飛、鸛鵒來巢、氣使之也。自此南方草木皆可移、南方疾病瘴癘之類、北人皆苦之矣。至熙寧初、其言乃驗。」

南人宰相は、何もこの王安石の例が最初ではない。呂中が『宋大事記講義』卷一六・引用奸人で、

「熙寧三年十月、以陳升之同平章事。（司馬）光曰、閩人狡險、楚人輕易。中略。昔邵康節聞杜鵑聲於天津橋上、曰朝廷用南人爲相、天下自此多事矣。夫（王）欽若當國亦南人也。豈自安石始也。」

と云うように、王欽若の例が以前にある。しかし、肝腎なのはその點ではない。呂中は説く。

「蓋天禧天聖之時、南方之氣未盛、所有者欽若一人而已。自安石爲相、所引者皆（呂）惠卿之險巧、（陳）升之之輕易、宰相參政皆用南人、此固溫公之所慮而康節之所先知也。」

熙寧期、南方人の中央への、すなわち、開封への集中が、洛陽人（その居住者の大部分は北人）にとっては異様な緊張の中で認識されたということが重要なのである。分司官の扱いにもその影響があらわれて来た。宮觀の提舉官が増設され、さらに、開封を除く三京の留守御史臺・國子監員も増員されることになったのがそれである。『卻掃編』卷下の記事を見よう。

「在外州府宮觀、舊惟西京崇福宮・南京鴻慶宮・舒州靈仙觀・鳳翔府上清太平宮・兗州仙源縣景靈宮太極觀、皆有提舉管勾官。熙寧初、始詔、杭州洞霄宮・永康軍丈人觀・亳州明道宮・華州雲臺觀・建州武夷觀・台州崇道觀・成都府玉局觀・建昌軍仙都觀・江州太平觀・洪州玉隆觀五岳廟・太原府興安廟皆置。又增判三京留司御史臺國子監員。蓋以優士大夫之老疾不任職者、而王荆公亦欲以實異議之人也。」（傍點筆者）

これは、呂中も、

「熙寧四年、增京觀官。詔每限員。此安石欲以處異議。」（『宋大事記講義』卷一六・增京觀官）

と云うように、中央で王安石の新法に異議を唱えた者を處断する爲の閑職として設定されたものだったのである。

開封から洛陽への對決の姿勢は、他にも様々な形を取った。それは、既述して置いた洛陽「萬花會」の停止とその前後の事情にもはっきり現れている。『曲洧舊聞』卷九、

「雒中舊有萬花之會、歲率爲之、民以爲擾。李中師<sup>⑧</sup>到官罷之、衆頗稱焉。然善結中官、爲富韓公<sup>⑨</sup>所惡。新法初行。中師希司農意指、多取寬剩、令韓公與富民均出錢、亦爲士論所鄙。中師字君錫、開封人也。」（傍點筆者）

神宗時代、開封と洛陽は、南人と北人との感情對立に加え、遂に新法派官僚と守舊派官僚との確執の渦中に位置することになったのである。

## (二) 「洛陽耆英會」

王安石の一連の新法政策は、熙寧二年の制置三司條例司の設置に始まる。それ以後、「自熙寧以來、宰相未有去位而留京師者。」（『石林燕語』卷十）と云う通り、新法に異議を唱えて開封を去る者、陸續として跡を絶たなかった。<sup>⑩</sup>熙寧二年のうちに、唐介が死去し、呂誨が開封を去り、富弼<sup>⑪</sup>等も去っていった。年が改まると、北京から青苗法を非とする上疏を敢行した大官韓琦（熙寧八年没）が河北安撫使の任を解かれた。熙寧四年には、司馬光が西京留臺に判たらんことを強く請い、四月には開封を離れて洛陽に去り、以後、熙寧七年四月、唯一度の例外はあるが、その他は全く「口を絶ちて事を論ぜず」、元豐七年に完成する『資治通鑑』の編纂に専心することになる。<sup>⑫</sup>洛陽での生活は、司馬光自身の「獨樂園記」（文集卷六六）に明らかだが、蘇軾の言葉を借りると、

「方其退居於洛、眇然如顔子之在陋巷、晏然如屈原之在陂澤、其與民相忘也久矣。」（『經進東坡文集事略』卷五五・司馬溫公神道碑）

とあるように、清貧な中にも慘然として厳しい毎日であった。

熙寧六年四月には、宋朝の「名臣福祿之冠」（『獨醒雜志』卷六）と稱えられる文彦博が、市易法に反對して判河陽府に轉

出した。のち、守太保兼侍中行太原尹・河東永興軍節度使となり、元豐四年には判河南府となつて洛陽に移り住む。

この時、既に富弼・司馬光は洛陽に在ること十年餘、「安居沖默、不交世務」（『渾水燕談錄』卷四）という暮し向きだった。文彦博が洛陽にやつて來ると、これを機會として、早速に「耆英會」なる集りが催されることになった。<sup>⑧</sup>一應、表面上は、唐白樂天「九老會」の故事を慕い、「洛中大夫賢而老自逸者」（同右）を悉く富弼の第宅に聚め、「置酒相樂」せんとする趣旨の集まりであった。参加者は計十三名。原則として年七十以上に限られた。當時、まだ七十に達していなかった司馬光は白樂天「九老會」時の、祕書監狄兼善・河南尹盧貞の故事（『白氏長慶集』卷三七）によつて參列するを得た。参加者は以下の如し。

- 。開封儀同三司守司徒武寧軍節度使致仕韓國公富弼、年七十九。
- 。河東節度使開府儀同三司守太尉判河南府兼西京留守司事潞國公文彦博、年七十七。
- 。司封郎中致仕席汝言、年七十七。
- 。太常少卿致仕王尙恭、年七十六。
- 。太常少卿致仕趙丙、年七十五。
- 。祕書監致仕劉几、年七十五。
- 。衛州防禦使致仕馮行己、年七十五。
- 。太中大夫充天章閣待制提舉崇福宮楚建中、年七十三。
- 。司農少卿致仕王愼言、年七十二。
- 。太中大夫提舉崇福宮張問、年七十。
- 。龍圖閣直學士通議大夫提舉崇福宮張燾、年七十。
- 。端明殿學士兼翰林學士太中大夫提舉崇福宮司馬光、年六十四。

それに、遠く北京から書を文彦博に通じ、會に名を列ねた、宣徽南院使檢校太尉判大名府王拱辰、年七十二、がいた。この「耆英會」、一度で終わらず、度々、場所を移して開催されたことは『前錄』卷十の記事から知られる。

「前略。潞公以地主、攜妓樂、就富公宅、作第一會。至富公會、送羊酒不出、餘皆次爲會。洛陽多名園古刹、有水竹林亭之勝。諸老鬚眉皓白、衣冠甚偉。每宴集、都人隨觀之。」

洛陽での退休官僚の集まりは「耆英會」に止まるものではなかった。ほかに「同甲會」「眞率會」の名で呼ばれるものが開かれている。『前略』に前文を承け、

「潞公又爲同甲會。司馬郎中(司馬旦)・程太中珣(二程子の父)・席司封汝言、皆丙午人也。亦繪像資勝院。其後司馬公與數公、又爲眞率會。有約酒不過五行、食不過五味、惟菜無限。楚正議違約、增飲食之數、罰一會。皆洛陽太平盛事也。後略。」

と見えるのがそれである。

洛陽から西南に三百三十里(『太平寰宇記』卷七)の位置に在る許州も、當時、洛陽と並んで士人が居住すること多く、ともに「士大夫之淵藪」(『墨莊漫錄』卷四)と云われていた。この地でも、新法を議して開封をあとした范鎮が、「飛英會」と名の附いた宴を催して、多くの士人と歡をともにしたことが知られている(『曲洧舊聞』卷三)。

以上、「洛陽耆英會」を中心とする二三の士人の會、いずれも、政界の中央から離れた者、より端的に言うならば、王安石の新法に異を唱える者、又は唱えた退休士人の集まりであったとすることができるとともに酒を酌み交わし、茶を喫し、花卉の美を愛でた、と一應は表面上ではなっている。だが、各々の機會に、既に神宗の親政時代に入って收束期を迎えていた新法の諸政策に對して、様々な意見が取り交わされたことは間違いない。退休官吏とはいっても、耆宿としての徳望を考えると、彼等の影響力は決して小さくはなかったのである。彼等のブレーンの存在として邵雍・程氏兄弟等の錚々たる人材が當時の洛陽に居住していたことは特に見遁せない事實である。彼等の事蹟は、簡單には『宋史』卷四二七・

道學傳や、朱熹の輯した『伊洛淵源錄』で窺い知ることができるが、富弼・司馬光・呂公著等が邵雍に第宅を提供し、その居を「安樂窩」と名づけた事實（『宋史』）からしても、彼等の淺からぬ交遊を知り得る。司馬光と二程子との交わりは、元豐八年三月、入京を齎る司馬光を極力なだめすかして開封に向かわせたのが兄の程顥（明道先生）だったことから窺えるし、この程顥と文彥博の交際は、彼の死後、文彥博が墓に「明道先生」と題した事實から察せられよう。二程子の學の源流と目される周敦頤（濂溪先生）も、江西南安の官に在った時、文彥博「同甲會」の一員、當時、通判軍事であった程珌に見い出され、それ以後、程珌の二子、すなわち二程子が從學することになったのである。いま一人の巨人・張載（橫渠先生）も、一時期、洛陽で講學したことがあり、まさに熙寧元豐年間の洛陽は「中國思想史上での一壯觀であつた」（島田虔次氏『朱子學と陽明學』七一頁）と言ふことができる。

元豐八年三月、神宗が在位十九年にして三十八歳の若さで崩御すると、哲宗が即位。ところが、わずか十歳であつたため、祖母宣仁太后が攝政となる。舊法黨系官僚から女中の堯舜と稱えられた太后は、當初、必ずしも、新法を全廢する考へはなかつたが、不安な政情を安定させるため、一まず、守舊派の元老達を開封に呼び寄せた。こうした情勢下、同月、入臨した司馬光は、衛士を始めとする開封都民の熱狂的歡迎を受けた。『長編』には、その時の光景を次のように傳えている。

「衛士見光、皆以手加額曰、此司馬相公也。民爭擁光馬、呼曰、公無歸洛、留相天子、活百姓。所在數千人聚觀之。光懼、會放辭謝、遂徑歸洛。」（卷三三三・元豐八年三月）

この時は、一旦洛陽に戻った司馬光も、この歳五月、太后の度重なる懇請に感じ、門下侍郎となつて、實に、十六年ぶりに再び開封の中央政府に返り咲いた。前四月に揚州から呼び戻されていた呂公著（七月に尙書左丞となる）とともに、ここに、いわゆる「元祐更化」が始まつたのである。

人事には、當然のように、先の洛陽での交遊が想い起こされる。文彦博の擔ぎ出しがその一つ。元祐元年三月、左僕射になっていた司馬光は、先の「洛陽耆英會」の大御所で、政界での先輩筋にも當たる文彦博を、左右の反對を押さえてまでも首相に据えんことを願ひ出た。當時、給事中で洛陽グループの一人・范純仁もこの人事を推進し、司馬光の執拗とも言える上奏で、四月、文彦博は太師を特授され、平章軍國重事となった（以上は、主に『容齋四筆』卷七・文潞公平章重事、に據る）。こののち、洛陽耆英會メンバーの一人・楚建中が、今度は文彦博の推薦を得て戸部侍郎に任命されることになる。この人事は、楚建中の死を以て沙汰止みとなったが、以上の経緯の中にも、洛陽居住士大夫の交遊とその結束を看取できるであろう。

### (三) 洛陽派の理財觀——その境界——

最後に、以上述べてきた洛陽派<sup>⑤</sup>の人々の理財觀について考え、その意味を探る。

新型能吏の一典型・包拯の『包孝肅公奏議』卷七・論歷代并本朝戸口（仁宗皇祐二年作）に、仁宗時代までに、宋朝の戸口數が漸増し、漢唐のそれを抜き去ったことが誇らしげに記してある。

「臣以謂前代戸口之目、三代已降、跨唐越漢、未有若今之盛者也。」

包拯に限らず、仁宗時代の士大夫官僚にとって、この事實は大變に重要な意味を持った。彼等には、古今未曾有の治世下に生きている自信が生じていたのである。一代前の眞宗期とともに、仁宗期の朝廷には「宋之賢相莫盛於眞仁之世。」（『宋史』卷三〇・論贊）の言葉が示すように人材も集まった。宋人の士風が一變するのも仁宗の慶曆年間を大きな境目としたとされている。<sup>⑥</sup>

こうした新しい世界をどう操縦していったらよいのか。その指針は後にも先にも無く、道は爲政者たる彼等自身が切り



大方の理財に對する考え方が、大きく變化を見せ始めたのも、大體、如右の時期を境とすると見做して間違いない。  
『前錄』卷一四の記事には、まだ、

「嘉祐中、李參自荆南帥召爲三司使。參政孫抃曰、參刻剝聚斂之材、不可用。改羣牧使。蓋祖宗不以財計用人、至仁宗朝、大臣所宗尚如此。」

というように、舊來の賤商觀が根強く文面に残っている。が、實際には、それ以前、茶法改革で名高い林特・李溥・陳恕、それに李諮等の「財務官僚」と呼ぶべき人材の登用が、眞宗時代以降、漸次、現實に始まっていた。彼等に對する一般士大夫の評價は、表面的には『東軒筆錄』卷一三に、

「自古爲國興財利者、鮮克令終。不然、亦禍及其後。漢之桑弘羊・唐之韋堅・王鉷・楊慎矜・劉晏之徒、不可勝紀、皆不自免。本朝如李諮之子・陳恕・林特子孫、不免非命。豈剝下益上陰責最大乎。」

とあるように、冷やかなものが大部分であつたが、しかし、財務に明るい人材は、次第に時代の要求する所となり、「性朴茂而辭藻不工」(『宋史』卷二九一・宋敏求傳)な北方人の中に「閩人狡險、楚人輕易」(前掲司馬光言)といった利にさとい南方人が多數進出して來ることになる。『前錄』卷一四には、前文に續ぎ、薛向が財用に明るい點を買われて登用されたことが記されており、『宋史』薛向傳を見ても、彼の財利に對する才覺が特筆してある。

「元豐元年、召同知樞密院。向幹局絕人、尤善商財計、算無遺策、用心至到。中略。遂由文俗吏得大用、及在政地云云」(卷三三八)

學術文學の才が無くとも、財利に強い能吏型の官吏には、ほかに、王安石青苗法への端緒を作つた前掲の李參を始め、孫長卿・李琮等々の人材が知られており、王安石の登壇が、新進である彼等の振張に與つて力があつたことは言を俟たない。

所であろう。

また、こうした能吏・財務官僚進出の事實と並行して、官僚士大夫の私販私營の記事が『長編』『宋史』を初めとする宋代の根本史料全般に亘り、それこそ枚舉に暇の無い程に頻見することに注意したい。官僚士大夫のこうした商行爲への接近は、宋代以降、如何ともし難い公然の事實となっている。勿論、舊來から官僚士大夫が販易に従事して庶民と營利を争うべきでない旨の不文律があったわけで、史料中にもその趣旨が度々強調されているのだが、如何んせん、遵守されていない。

王安石の新法諸政策が繰り出された時、守舊派官僚からは様々な反対意見が表明され、彼等のほとんどが王安石側の反感を買って國都開封を去った。そして、西京洛陽が、前代までの歴史的要因を含んで、反新法守舊派官僚の一大集結地となつたのは既述の通り。その彼等の反対意見のいくつかを見ると、大部分が舊來の賤商觀に裏打ちされた異口同音とも言える一律に抽象的な論旨で貫かれている。

王安石の變法は韓琦が朝廷を去った時（治平四年九月辛丑）に始まり、富弼が同平章事を罷めた時（熙寧二年十月丙申）に成つたと云われている。神宗の新法に對する疑念も、熙寧三年二月に、當時、河北安撫使であつた韓琦が青苗法施行にクレームをつけたことに發したとされている。その同じ年二月、司馬光が王安石に與えた書簡が彼の文集に残っている（『溫國文正司馬公文集』卷六〇・與王介甫書）。仁宗末年に、同じ新進として「嘉祐四友」と呼ばれた仲だけあって、その後段では暗に呂惠卿の叛意を豫見して忠告するなど、情意に溢れた内容となっている。しかし、その書簡、肝腎の新法批判の段では、

「於是財利不以委三司而自治之、更立制置三司條例司、聚文章之士及曉財利之人、使之購利。孔子曰、君子喻於義、小人喻於利。樊須請學稼、孔子猶鄙之、以爲不如禮義信。況講商賈之末利乎。」

とあるように古典（『論語』里仁篇・子路篇）を援用して新法攻撃の武器とするだけで、舊來の定石通り。また、後文でも、

「今介甫爲政、首建制置條例司、大講財利之事。又命薛向行均輸法於江淮、欲盡奪商賈之利。又分遣使者散青苗錢於天下、而收其息、使人愁痛、父子不相見、兄弟妻子離散云云」

と、常套的な抽象議論に終始している。洛陽に退居したのち、熙寧七年四月、「求言詔」に感じて「默さんと欲して忍びず」、歸洛後、例外的に上疏することになった「應詔言朝政闕失狀」(『文集』卷四五、『長編』卷三二・七年四月甲申)の中でも朝廷闕政六事を擧げているが、内容はと言えば、「三曰、置市易、與細民爭利、而實耗散官物。」といった調子のおざなりな批判で、一々具體的に反論するというまとまった體系が背景に有るわけではなかった。

もう一人の洛陽派の大立者・文彦博も、度々、新法諸策に非難の聲をあげた。神宗に向かつて、「爲與士大夫治天下、非與百姓治天下也。」(『長編』卷三二・熙寧四年三月戊子)と言明したのも、この文彦博だが、ここでは、その市易司に對する發言を見てみよう。熙寧六年、開封の相國寺に參詣の途次、御街の東廊で、果實賣買までもが官府の監督下にあるのを目撃した彼は、もう矢も楯もたまらなくなった。近くには契丹國使が滞在する都亭驛があつて、北使に宋國の國體を輕侮されることを恐れたからである。彼は訴える。

「凡衣冠之家網利於市、摺紳清議衆所不容。豈有堂堂大國、皇皇求利、而不爲物論所非者乎。」(『文潞公集』卷二〇・言市易。『長編』では卷二四二・熙寧六年春正月辛亥の條。そのすぐ後に、王安石の反論が附いている。この上奏が原因で、文彦博はこの年四月、判河陽府となつて朝廷を離れることになる。)

司馬光の新法批判同様、理財に對する舊來の嫌惡・賤商觀が表面に現れて來ただけで、背景に確たる反理財論が有るわけでは無かつたのである。そのことは、元祐初年以後の彼等の治政内容からも次第に明らかになる。神宗崩御の後、哲宗の即位、宣仁太后の攝政が續き、洛陽派の多くが洛陽から開封に呼び戻され、改めて現實の中央政治の中樞に従事することになったとき、彼等の諸政策はただ舊に復することに終始して、内外に無用の混亂を惹き起こすことになったのである。

司馬光は宰相となつて僅か八箇月、十分な手腕を發揮しないまま、五箇月前に死去した王安石を追うように世を去つた。より以上の汚名を残さなかつたのは、彼にとっては、むしろ幸いだったのかも知れない。時代は、既に、彼等洛陽派のもとから離れ、厳しい現實に即應できる新しい型の財務官僚と、その理論とを必要とする段階に達していたのである。

## 結 び

北宋時代の西京洛陽と東京開封は、一面で相互補完の關係にあり、また、より多くの面で、對立關係の内に在つた。本稿では、この兩京の相剋を幾つかのファクターに即して述べて來た。その際、現實の都市空間とその居住者、という相互に關聯し合う二箇の對象には常に留意したつもりである。だが、紙數に限りがあつて、思うように説き盡くせなかつた點も少なくない。以下に、そのいくつかを展望とともに述べ、結びに代えたい。

宋代の官僚には、財政を語り得ない官僚というものはない、と言われている。確かにその通りである。しかし、その官僚群の中には、合理主義を心情とする新型の財務官僚に、素直についてゆけぬ者も多く、舊來の守舊派官僚と吏治に通じた能吏型の官僚群との間には、融和し難い軋轢が度々起きた。筆者の見方によれば、この問題の核心は「理財」に在つた。それをどう受け止めて、どう理解するか。これは取りも直さず、現實をどの様に把握し、また、いかに對處するか、ということであつた。

つまり、士大夫の商販行爲が普遍化する風潮の中で、理財がいかに受け止められ、彼等の舊來の賤商觀がどのように崩れ、また、どのような曲折を経て、理財の學への理念化が進んでいったのか。北宋の眞宗仁宗時代以降、未曾有の新時代に突入し、都市の發達、江南の經濟發展という現實を眼の當たりにし、爲政者たるべき官僚士大夫達の意識がどう變つたのか。新しい秩序原理（問題對象としようとするのは、とりわけ、經濟秩序、及び理財觀といった一面である）がどのようなプロセスを経て形成されていくのか。本稿では、以上の諸問題の起點を究明したに止まり、多くが未消化のままに残された。

また、都市と知識人、すなわち、知識人グループの成立とその基盤としての都市の勃興という問題があるが、いまは取り敢えず、洛陽に限って述べて置く。南宋永嘉學派の一人・陳傅良が「温州淹補學田記」（『止齋先生文集』卷三九）で、宋代の學風を説いている。

「宋興、士大夫之學亡慮三變。起建隆至天聖明道間、一洗五季之陋、知鄉方矣。而守故蹈常之習未化。范子始與其徒抗之以名節、天下靡然從之、人人恥無以自見也。歐陽子出、而議論文章粹然爾雅、軼乎魏晉之上。久而周子出、又落其華、一本於六藝、學者經術遂庶幾於三代。何其盛哉。則本朝人物之所由衆多也。余掌求其故。三君子皆萃於東南、若相次第然、殆有天意云云」

ここで取り擧げられている范仲淹（蘇州吳縣人）・歐陽脩（吉州廬陵人）・周敦頤（道州營道人）三人の宋代文化への貢獻の深さは、正しく陳傅良の言の通りとして宜いであろう。私にとつて重要に思われるのは、彼等がいずれも最盛期の洛陽と、三者三様に深い関わりを持ったという事實である。仁宗期以降の洛陽の思想風土については、本稿で觸れて置いたが、その人材の擴がりと影響の巨大さを考えると、考慮し残された問題は、まだ、あまりにも多いとしなければならぬ。

さらに、洛陽人士の經濟基盤についても、多くが未解明のままに残った。中心人物の大部分が、陝西・山西出身者であることは、新法經濟政策に強硬な反對を唱えたことと關聯して、示唆的な聯想を掻き立てずには置かない。しかし、その究明には、なお、慎重な操作と手續とを必要とするであろう。

## 註

- ① 邵伯溫『河南邵氏聞見錄』卷二（以下、これを『前錄』と略稱する） 著者邵伯溫は、洛陽に縁深い思想家・康節先生邵雍の男。この『前錄』には、紹興二年の自序がある。いま話題にしている嘉祐八年には、邵伯溫は七歳で、この光景を眼前に見ていた。
- ② 例外的に、熙寧・元豐期の洛陽を扱った論文に、吉田清治氏の「黨争史上より觀たる熙豐年間洛陽と其氣風」（文化一の二・一九三四年）があるが、素描に止まっている。
- ③ 『前錄』卷七參照。
- ④ 以上の経緯について、南宋呂中の意見を聞こう。『宋大事記

講義》(葉適等の編次に係るという。『四庫全書總目提要』卷八八) 卷三・都汴京の條。

「國初、所以不都關中而都汴者、以靈武燕冀之地未復也。然洛與汴皆河南之士、洛之險猶可恃、而汴則無險可畏也。欲爲四方有事之備、則當都洛陽、高城深池、堅甲重兵、以杜諸夏不虞之備、伐北夷深入之謀。若已都汴、則不得不以守四夷爲說。此太祖所以有都西京之議也。然都汴、固不得已。都西京、亦不得已也。使太祖收靈夏復燕薊、則必都長安矣。」

また、すぐ前の文では次のように言っている。

「汴與洛俱河南地也。國家不都洛而都汴者、以四方輻湊漕運之法遠近俱便故也。東南之粟自汴河入、陝西之粟自黃河入、陳蔡之粟自惠民河入、京師之粟自廣濟河入。論四河之所入、則東南爲多。此太祖所以有不出百年東南民力殫矣之憂、而欲都西京。」

開封が、汴河を通じて直接に江南經濟と結びついていたことは、洛陽との相違を考える上で、極めて重要な關鍵である。

- ⑤ 魏以後、「雒」字は五行思想に従って「洛」字に改められた。顧炎武『歷代帝王宅京記』卷七等參照。

- ⑥ この北魏洛陽城の中國首都史上に於ける位置及び後漢の洛陽城より唐の長安城まで、連續的發展が認められる點、以上は森鹿三氏「北魏洛陽城の規模について」(『東洋學研究・歴史地理篇』所收)に詳論されている。なお、中國の都城プランに關しては、古くは那波利貞氏に「支那首都計畫史上より考察したる唐の長安城」(『桑原博士還曆記念東洋史論叢』所收)が有り、近年、礪波護氏にも、その後の成果をまとめられた論文「中國

の都城」(上田正昭氏編『日本古代文化の探究 都城』所收)が有る。

- ⑦ 物資生産は唐中期以降、江南に依存する方向に進む。韓愈の「送陸歙州詩序」に「當今賦出於天下、江南居十九」と言うのは、この情勢を如實に示す。他に、桑原隲藏博士「歷史上より觀たる南北支那」(『全集第二卷所收』)、岡崎文夫・池田靜夫氏共著「江南文化開發史」、青山定雄氏「唐宋時代の交通と地誌地圖の研究」、特に、第六・唐宋の汴河、全漢昇氏「唐宋帝國與運河」(『中國經濟史研究』上冊所收)參照。

- ⑧ 河南省博物館・洛陽市博物館「洛陽隋唐含嘉倉的發掘」(『文物』一九七二年第三期)、鄒逸麟氏「從含嘉倉的發掘談隋唐時期的漕運和糧倉」(『文物』一九七四年第二期)、礪波氏前掲論文五・洛陽の含嘉倉、參照。

- ⑨ 青山氏前掲書、第八・唐宋時代の轉運使及び發運使、濱口重國氏「唐の玄宗期に於ける江淮上供米と地稅との關係」(『秦漢隋唐史の研究』下卷所收)參照。

- ⑩ 『資治通鑑』卷二六六、開平元年四月戊辰。宮崎市定氏「五代の國都」(『アジア史研究』第一卷・讀史劉記所收)參照。なお、趙翼『陔餘叢考』卷一八・汴京始末、には汴州の帝都としての確固たる位置は末帝朱友貞の時に定まったとする見解がある。

- ⑪ 『資治通鑑』卷二八一・天福三年冬十月。

- ⑫ 『資治通鑑』卷二八六・天福十二年春正月辛卯。同書卷二八七・天福十二年六月戊辰。

- ⑬ 「宋代開封と張擇端『清明上河圖』」(史林六一の五)「宋代

の都市研究をめぐる諸問題——國都開封を中心として——(『東洋史研究三七の二』)。

⑭ 『資治通鑑』卷二九一・廣順三年九月。

⑮ 『宋會要輯稿』(以下、『會要』)方域一・東京雜錄、太祖建隆三年五月の條に、

「命有司案西京宮室圖、修宮城。義成軍節度使韓重贇督役。」  
という記事が見えている。『石林燕語』卷一にも關聯記事がある。

⑯ 『元河南志』卷一、

「按、韋述記、每坊東西南北各廣三百步、開十字街、四出趨門。自唐五代、鞠爲荆棘。後依約舊地列坊云。坊久無榜、皇祐二年、張奎知府事、命布列之。」(『宋史』卷三四・張奎傳、及び『名臣碑傳琬琰集』中集卷一〇・張樞密奎墓誌銘、參照)

洛陽城修築の概略は『會要』方域一・西京雜錄、に窺うことができる。

『元河南志』は敘述の多くを、宋の宋敏求『河南志』に依據している。現行本は全四卷。宋敏求本は二十卷であったとされ(『直齋書錄解題』卷八、等々に著録す)、現存はしないが、司馬光が與えた序文『河南志序』(『溫國文正司馬公集』卷六五)が残っている。現行本『元河南志』卷四の末尾には、繆荃孫氏の跋文が附せられている。本書は徐星伯先生松が『全唐文』を編修した際に鈔録したものであることを指摘し、

「前略。一日、見河南志鈔本。一巨帙無卷。數用全唐文格子。

封面題河南志。識是徐星伯先生手筆。城池・宮闕、自周至唐悉具。知是宋次道(すなわち宋敏求)河南志之首冊、而星伯先生修全唐文時所錄者。中略。開卷即云、河南府路羅城。方知大典所錄爲元河南志、而仍是宋志原文、至述元時、寥寥數語。必是星伯先生止錄宋志、元代事、則置之耳。下略。」と述べている。

⑰ 開封の坊制・市制とその崩壊過程については、前掲拙稿を參照されたい。

⑱ 『會要』には「城内一百二十坊」とあるが、實際には一百十九坊しか記載されていず、修業坊一坊が抜けている。

⑲ この記載が北宋のいつの時期のものかは、殘念ながら、明らかでない。

⑳ 前掲註⑯を參照。

㉑ その操作の過程については煩瑣を避けるため、説明を省略する。

㉒ 『會要』方域一・西京の條に載せる西京城門名を見ても、ほとんど唐代と同じであることがわかる。

なお、洛陽城中の宮城については、清阮元輯『漢晉洛陽宮城圖四紙』(道光二十年揚州阮氏摹刻本)中の一紙「宋西京城圖」(標題には四紙とあるが、實際には、この圖を含め、計五紙を輯める。繆荃孫氏『元河南志』跋文參照のこと)が參考になる。

㉓ 圖に示した坊名は、坊牆が消失し、坊制の實體が崩壊し、街路名と實質に於いて異ならなくなったのちも、なお、地域を表示する時の指標となる。

㉔ 『會要』方域二、『玉海』卷一六等を參照。建都の詔は、北

京のそれと同じく『宋大詔令集』卷一五九・政事一二・建都の項に收められている。また、關聯記事が、葉夢得の『石林燕語』卷二、及び卷八に見える。

㉔ 「廂」については、曾我部靜雄氏「中國及び古代日本における鄉村形態の變遷」第五章、等を参照されたい。

㉕ 呂夷簡も、この事件ののち、一時期、中央政界を去って、判許州に轉出する。三年後の康定元年に再び宰相に復歸。この

「慶曆の黨議」の前段階については、『宋史』の范仲淹・呂夷簡各本傳のほか、特に兩者の關聯については、王德毅氏「呂夷簡與范仲淹」(『宋史研究論集・第二輯』所收)が詳しい。

㉖ 既述の如く、慶曆三年二月、北京の便殿に「靖方」の名が與えられている。この殿名からしても、北京建都の根本事情が看取できよう。

㉗ 勿論、この性格づけは經濟都市開封に對してのものである。

開封が、政治の中樞センターとして存在するほかに、經濟都市としての機能を十二分に持った事實は、前掲拙稿で強調して置いた。

㉘ 河南・洛陽の一般的知識を得るためには、中國知識叢書中の一冊『河南』が便利である。

㉙ 洪邁『容齋隨筆』卷第二・唐重牡丹、歐陽脩『洛陽牡丹記』等を参照。

㉚ 同書卷二には、「洛中花工」の記事があり、卷九にも關聯記事がある。「萬花會」のその後については、後文の『曲洎舊聞』卷九の記事を参照されたい。

㉛ 歐陽脩『洛陽牡丹記』等に見える語。

㉜ 『前錄』の著者、邵伯溫の男・邵博に『河南邵氏聞見後錄』全三十卷(以下、『後錄』)の著作がある。その卷二四と卷二五に、この『洛陽名園記』の全文が録してある。

邵博の著書は、『前錄』とともに北宋時代の洛陽を知る上で極めて有用の書である。だが、いわゆる「洛閩學派」黨派間の争いが表現内容にまで影響を及ぼしている部分があり、その點には十分な注意が要る。

㉝ 陸行の場合でも、急げば、片道一日一晚で到達できた。歐陽脩『洛陽牡丹記』

「洛陽至東京六驛。舊不進花。自今徐州李相迪爲留守時、始進御。歲造牙校一員、乘驛馬一日一夕至京師。」

なお、『澠水燕談錄』卷八をも参照。李迪が知河南府となったのは仁宗の天聖七年のこと。

㉞ 元豐二年に、范子淵・宋用臣等の建議で、從來の黃河の水流を取り入れる代わりに、洛水を導いて汴河に通ずる工事が行なわれ、一時的に「清汴」が開通した。この時、舊汴口が閉じられ、新洛口が開かれた。ところが、「清汴」は元祐五年十月に至って廢止され、再び黃河を汴河に流入させることになる。以上は、『長編』卷二九七・元豐二年三月庚寅、及び卷二九八・六月甲寅の條、『宋史』卷九四・河渠志四、等を参照。「清汴」については、青山定雄氏「唐宋時代の交通と地誌地圖の研究」二五四頁に簡単な説明がある。

㉟ 近接した都市の都市機能の分化は、本邦の大阪と京都の關係について見ても知られることだ。大都市が互いに近接して存在すると、各個獨立した發展よりも機能分化が促進され、都市性



格を補完し合う形へと進む。山崎正和・黒川紀章・上田篤編著『都市の復権』参照。

③⑦ 「貴人多葬洛陽」(『宋史』卷二九一・李若谷傳)の句からわかるように、洛陽には貴要の葬地も少なくなかった。

③⑧ 「宋代における華北官僚の系譜について」(『聖心女子大學論叢』21)「同右」(その二)「同右」(25)「同右」(その三)「中央大學文學部紀要・史學科12」「宋代における華北官僚の婚姻關係」(中央大學八十周年記念論文集・文學)「北宋を中心とする士大夫の起家と生活倫理」(『東洋學報』五七一・二合併號)。

③⑨ 河南呂氏の家系については、衣川強氏「宋代の名族——河南呂氏の場合——」(『神戸商大人文論集』九の一・二)。

文・富兩人が呂蒙正の門から出たことは、『前錄』卷八、に見えている。

④① 呂蒙正の園宅は、集賢坊と永泰坊とに在った。『元河南志』卷一。士大夫の第宅園林が那邊に在ったかは、彼等の現實の交遊範圍を知る一つの手掛となる。後文でも、わかる分について、第宅の所在を示して置いた。附圖參看。著名人の大部分が城内東南部に居住していた。

④② 張齊賢の園宅は會節坊。

④③ 歐陽脩の役割については、劉子健氏「歐陽脩の治學與從政」等を参照。ちなみに、蘇軾の「六一居士集跋」(『經進東坡文集事略』卷五六)は歐陽脩の業績を簡單ながら述べ盡くして餘す所がない。

④④ 錢惟演の族孫・錢世昭の輯に係るこの書(『四庫全書總目提

要』卷一四〇、參照)では、妓女との閑柄を暴露して歐陽脩を貶めること急である。

④⑤ 『澠水燕談錄』卷四。歐陽脩は、特に、同僚の尹師魯・梅聖俞・楊子德・張太素・張堯夫・王幾道とは「七友」と稱し、その文を競い合った。

④⑥ 唐代の分司官についての一通りの説明は、唐朝のそれを中心として、王鳴盛『十七史商榷』卷八五に見える。

④⑦ 『曲洧舊聞』卷二、を参照。

④⑧ 南人北人の區別は、大體、淮水を以て分界線としている。前掲桑原論文參照。

④⑨ 同書卷六をも参照。陳升之は湖南人。閩人は呂惠卿を指す。『道山清話』に、司馬光と呂惠卿の紛争を記し、人傳での「一箇陝西人、一箇福建子、怎生厮合得著」という語を録している。

④⑩ 吉岡義信氏「北宋初期における南人官僚の進出——とくに王欽若・丁謂の場合——」(『鈴峯女子短期大學研究集報・第二集』)參照。

澶淵の盟の際には、金陵に都するか成都にするか、南人北人對立に遷都問題も絡んだ。『宋史』卷二八一・寇準傳。

④⑪ 太祖は「南人を用いて宰相としない」と明言していたが、その後、王欽若が南人最初の宰相となり、さらに、王安石の登壇で、當初の太祖の言も有耶無耶になってしまった。『道山清話』「太祖嘗有言、不用南人爲相。實錄國史皆載。陶穀開基萬年錄・開寶史譜、言之甚詳。皆言太祖親寫南人不得坐吾此堂、刻石政事堂上。或云、自王文穆大拜後、吏輩故壞壁、因移石

於他處、後漫不知所在。既而王安石・章惇相繼用事、爲人竊去。如前兩書、今館中有其名而亡其書也。頃時尙見其他小說、往往互見、今皆爲人節略去、人少有知者、知亦不敢言矣。」

⑤1 『石林燕語』卷七には「以知州資序人充、不復限以員數。」と記している。『燕翼詒謀錄』卷四にも、同内容の記事が見える。また、『朝野類要』卷五・宮祠、をも参照のこと。

⑤2 宮觀は先の留司御史臺・國子監に較べても、なおのこと閑職であった。『溫國文正司馬公文集』卷四五・再乞西京留臺に、「竊見西京留司御史臺及國子監、比於宮觀、粗有職業云云」の句が見える。

⑤3 原文では「李師中」となっているが、「李中師」の誤りであるのは明らかなので意を以て改めた。

⑤4 すなわち富弼。後文で説く、「洛陽耆英會」の有力メンバーの一人である。

⑤5 『宋史』卷三三一・李中師傳、及び『朱文公文集』卷八五・跋富文忠公與洛尹帖、等を参照。

⑤6 さしあたり、熊公哲『王安石政略』附録「因議新法罷職人名表」が便利である。

⑤7 富弼の洛陽隱退後の生活は、范純仁が「退居西都十餘年、深居罕出。」と傳えている（『范忠宣公文集』卷一七・富鄭公行狀）。ほかに、『涑水紀聞』卷一五等参照。

⑤8 三浦國雄氏「資治通鑑考」（日本中國學會報・第二十三集）、及び田中謙二氏『資治通鑑』（中國文明選一）解説部分を参照。三浦氏の論考、『資治通鑑』執筆中の司馬光には、新法に對する憤りがあつたとする。他の部分には、必ずしも納得でき

ぬ點もあるが、この説には左袒して置きたい。

⑤9 熙寧中、洛陽に居住していた者の大體と、その風紀については、『前錄』卷一九の言が簡潔でよい。

「熙寧中、洛陽以道德爲朝廷尊禮者、大臣曰富韓公、侍從曰司馬溫公・呂申公（呂公著）。士大夫位卿監、以清德早退者十餘人。好學樂善有行義者幾二十人。康節先公隱居謝聘、皆相從。忠厚之風聞於天下。里中後生皆知畏廉恥、欲行一事、必曰無爲不善、恐司馬端明知、邵先生知。嗚呼盛哉。」司馬光・邵雍の、洛陽士人中での重みが看取できよう。

⑥0 この「洛陽耆英會」については、『溫國文正司馬公文集』卷六五・洛陽耆英會序（元豐五年正月作）、『夢溪筆談』卷九（胡道靜氏校證本三五二頁）、『容齋四筆』卷八、『前錄』卷十、『涑水燕談錄』卷四、等を参照。また、麓保孝氏『北宋に於ける儒學の展開』一八七頁―一九二頁も参考になる。

⑥1 白樂天「九老會」に倣った催しは、元豐の耆英會以前にもあった。至道元年、開封で李昉を中心として「九老之會」が計畫されたことがある（『容齋四筆』卷一二）。結局、これは、當時の蜀の政情不安によって中止されたが、「其中兩宰相乃著一僧、唐世及元豐耆英所無也。」というように、多少、異質な集まりとなる筈であった。

慶曆中には、蘇州で徐祐を中心とした會が開かれた。『中吳紀聞』卷二・徐都官九老會。これに觸發されて、慶曆の末年には、南京で杜衍が主宰者となって「五老會」が開かれている。『涑水燕談錄』卷四。

⑥2 「同甲會」については、沈括『夢溪筆談』卷一五にもま

った記事が見える。

⑥③ 『避暑錄話』 卷上参照。『溫國文正司馬公文集』 卷一四所載の律詩からすると、参加者は、司馬旦・席汝言・王尙恭・楚建中・王慎言・宋道・司馬光の七名。別の機会には范純仁が加わった。張耒『明道雜誌』に、司馬光とその范純仁の洛陽での生活の一端が窺える。

⑥④ 『墨莊漫錄』 卷四、

「許洛兩都軒裳之盛、士大夫之淵藪也。黨論之興、指爲許洛兩黨。崔弼德符・陳恬叔易皆戊戌（西曆一〇五八年）生、田晝承君・李彥方叔皆己亥（一〇五九年）生、並居潁昌陽翟、時號戊己四先生、以爲許黨之魁也。故諸公皆坐廢之久。」

⑥⑤ 范鎮と司馬光との親密な交遊ぶりは『宋史』 卷三三七・范鎮傳に見える。

「鎮平生與司馬光相得甚驩、議論如出一口。且約生則互爲傳、死則作銘。光生爲鎮傳、服其勇決。鎮復銘光墓云。」

⑥⑥ 邵伯溫『前錄』、及び邵博『後錄』にも、彼等の言行の多くが載っている。

⑥⑦ 彼等の交遊は、ほかに『曲洎舊聞』 卷二、『道山清話』 等に散見する。

⑥⑧ ここで言う「洛陽派」は、いわゆる「洛黨」「蜀黨」「朔黨」の「洛黨」とは全く異なっている點は、本稿の讀者にはもはや説明の要もないであろう。程頤を盟首とする「洛黨」云云についての議論は、本稿の論旨と直接には關聯しない。

⑥⑨ 宮崎市定氏「宋代の士風」（『アジア史研究』 第四卷所收）等参照。

⑦⑩ 財務官僚の大多數が南人であるのは、江南開發とその經濟發展を土臺にして考えれば、むしろ當然といえる。葛紹歐氏「北宋之三司使」（食貨第八卷第三・四期）には、財務官僚の元締とも言うべき三司使に、仁宗期以後、南方人の進出が目立つようになったことが説かれている。周藤吉之氏「宋代官僚制と大土地所有」等をも参照。

⑦⑪ 次の一文が参考になる。『東軒筆錄』 卷五、

「前略。宿望舊人、議論不叶。荆公遂選用新進、待以不次。故一時政事、不曰皆學、而兩禁臺閣内外要權、莫匪新進之士也。」

⑦⑫ 『州縣提綱』 卷一・戒親戚販鬻、は士大夫が私販に至る有様を敘していて頗る参考になる。全漢昇氏「宋代官吏的私營商業」（『中國經濟史研究』 中冊所收）には、官吏私營の多數例が擧げられている。

『宋史』 卷二七七・許驥傳に、父許唐の生涯を述べ、「嘗擁商賈於汴洛間、見進士緩行而出。竊歎曰、生子當令如此。因不復行商。」

とあるが、この文面からは清代の「棄儒就商」（例えば、重田徳氏『清代社會經濟史研究』 二九八頁以降参照）とは逆の状況が窺える。ここで、單純に、宋代は「棄商就儒」などと言えないまでも、宋代以降、「儒」と「商」の結びつきの強さが、既に、動かし難いものとなりつつあった、とは言い得よう。

⑦⑬ 二例掲げて置こう。『會要』 食貨一七・商稅・天聖四年四月六日。

「審刑院言、准咸平四年詔、京朝幕職官・州縣官、今後在任

及赴任得替、不得將行貨物色與販。如違、並科違敕之罪、商物依例抽罰。如非與販、即逐處不得妄有點檢申舉。俸餘買物、贍家之外、貨賣如有發露、並作違制私罪定斷。後略。」  
もう一つは北宋末の例。同じく『會要』の食貨一・農田雜錄・政和元年四月五日、

「詔、士大夫與民爭利、多占膏腴之地。已有令文、令監司常切檢舉。」

⑦④ 呂中『宋大事記講義』卷一六・罷舊相用新進。

「安石之變法始於韓琦之罷、成於富弼之罷。中略。琦罷而安石至矣。然猶以弼爲相者、蓋由國家之事、必謀元老、而安石雖賢、然終亦新進也。弼既求出、而聖意始不知所倚矣。」

韓琦が王安石の登庸を認めていなかったことは『宋史』（卷三一二）に見える。

⑦⑤ 『續資治通鑑長編拾補』卷七・熙寧三年二月壬戌朔。

⑦⑥ 『卻掃編』卷中。あとの二人は、呂公著・韓維。

⑦⑦ 「洛陽耆英會」での最長老・富弼は、會の翌年、元豐六年に既に死去していた。

⑦⑧ その位置は、いまのところ『東京夢華錄』卷二・宣德樓前省府宮宇、の項等を参照されたい。その南側に「果子行」があった。いずれも汴河と御街の交差點・州橋の近傍である。相國寺へは、その地點から汴河に沿って東へしばらく行けばよかった。

⑦⑨ 次の一文は、彼等の治政態度を實にくつきりと示している。

『晁氏客語』

「司馬溫公作相。以李公擇（李常）爲戶部。公擇文士、少吏才。人多訝之。公曰、方天下意朝廷急於利、舉此人爲戶部、使天下知朝廷之意、且息貪吏望風掊刻之心也。」（『長編』卷三七一・元祐元年三月辛未、參照）

⑧⑩ 宮崎市定氏『中國史』上卷・六七頁。

⑧⑪ 参考になった一論文を掲げて置く。近藤一成氏「宋代永嘉學派の理財論——葉適を中心として——」（『史觀第九二冊』）

gentry on the other.

As gentry's subordinates, the *nu-p'u* carried on a wide range of production and management duties. Moreover, due to the gentry's tendency to relieve themselves of actual managing, they were often in the position of exercising authority over the peasants. By employing the *nu-p'u*, the gentry could not only increase their wealth and influence but also accelerate the breakdown of the peasantry, creating further reserve of *nu-p'u*. The *nu-p'u* on their part could exploit the peasants in the name of the gentry.

In the upshot, the lord-subordinate relationship between the gentry and *nu-p'u* signifies that a considerable portion of the population eluded the authority of the state. By becoming *nu-p'u* the peasants could escape from taxes and corvée services, and by commanding a large number of subordinates, the gentry could be ensured of the base for their power and influence.

## The Literati of Lo-yang 洛陽 under the Northern Sung

*Kida Tomo'o*

In addition to K'ai-feng, 開封, the capital, the Northern Sung maintained three sub-capitals in the west, south, and north. Of these, only the Western Capital located in Lo-yang was established from the beginning of the dynasty.

Lo-yang and K'ai-feng were almost identical in area and organization, but the two had great difference in natural and historical environment. Roughly speaking, Lo-yang was a cultural center, whereas K'ai-feng a political and economic center. This character of Lo-yang became even more pronounced after the Northern Capital was established during the reign of Jen-tzung 仁宗. Also, a keen rivalry with K'ai-feng started growing around this time.

The beautiful landscape of Lo-yang attracted many literati and retired officials since the early years of the Northern Sung. During the Jen-tzung's

reign, with Lo-yang emerging as a center of flourishing literary activities under such men as Ou-yang Hsiu 歐陽脩, the number of literati settling grew even further. Out of this phenomenon came the notion that Lo-yang was the *Nest of Literati* 士大夫之淵藪, which provided the inhabitants the justification necessary for following a route quite distinct from that of K'ai-feng.

On the political side, the rivalry often took the form of pressure from K'ai-feng and resistance from Lo-yang. With the rise of Wang An-shih 王安石, the tension between the two rose to a peak. The literati of Lo-yang, notably those associated with the *Lo-yang ch'i-ying hui* 洛陽耆英會 e. g., Fu Pi 富弼, Wen Yen-po 文彥博, and Ou-yang Hsiu were among the most vociferous of Wang's critics. While the bureaucrats in K'ai-feng who executed Wang's policies were mostly from the south, where a spectacular economic growth had been taking place, these men were by and large northerners. And their ignorance of and distaste for economic matters, which they termed *li-ts'ai* 理財, are evident in their writings, usually full of hatred of K'ai-feng bureaucrats. The Lo-yang literati's contempt for *li-ts'ai* accounts for, more than anything else, their failure in coping with the problems of the time when they came to power under Che-tzung 哲宗.

Behind the rivalry between K'ai-feng and Lo-yang under the Northern Sung lies, as it has been explained, the difference in opinion concerning *li-ts'ai* between their élites. To examine how this problem of *li-tsai* was understood by the literati throughout the Sung dynasty shall be a task from now.

## On the Career of Ti-wu Lun 第五倫

### *Kano Naosada*

In the latter half of the Western Han the families of imperial consorts emerged as a powerful political bloc, often endangering the survival of the dynasty. Wang Mang 王莽 who eventually usurped the throne belong to one of those families.

The Eastern Han also suffered from empress' families throughout its 200 years history. Moreover, the growing influence of eunuchs added